

元英国外交官チャールズ ル ガイ イ トン (1/6)

:

明:

哲学者/作家による真の探求は、信仰と行を和させるための恒常的な葛藤にまされました。第1部
: 世俗的な少年代、そしてアラビアの言及。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 著名人](#)

より: ガイ イ トン

📅4 Sep 2012

集日 06 Oct 2012

私は 中に英国人の の元、スイスに生まれました。私の 生 には、第一次世界大 を集 させ
た最 的な平和条 がロ ザンヌにおいてトルコとの で ばれました。世界中を き み、すべて
を えてしまった 乱は、一 的に 束を迎えました。その影 によって古い 信や道 は打ち かれ
ました。私の家族の背景は血の葛藤による染みがありました。私が生まれたとき、父
は既に67 に しており、彼はナポレオン ボナパルトとの 下に生まれたのです。双方とも
に兵士でした。

私には故 くらいあっても良さそうなものですが、それすらありませんでした。私は
スイス生まれでしたが、スイス人ではありません。私の母はフランス育ちで、フラン
ス人をこよなく しましたが、私はフランス人でもありませんでした。私は英国人だっ
たのでしょうか？ そう感じたことは一度もありません。私の母は、英 は冷たい、愚かな
、 性で知性も文化もない言 であることを、 り返し述べ けて来たのですから。私は彼ら
のようになりたいはありませんでした。では、私はどこに属していたのでしょうか？
回想すると、この奇妙な少年 代は、イスラ ムを信仰するための良い布石だったのでは
ないかと思えてきます。ムスリムはどこで生まれようと、どの人 であろうと、イスラ
ムの地であるダ ルル=イスラ ムが故 なのです。パスポ トは 世と来世ともに、シンプル

な信仰宣言である「ラ イラ ハ イツラ ッラ 」です。世においては安全 安定性を期待すべきではなく、明日にでも死が れるかもしれないことを念 に入れます。また、 固とした 基はこの脆き地球には置かず、自存する御方に して置くのです。

キリスト教に してはどうだったのでしょうか？父がもし信仰を持っていたとしても、彼は一度たりともそれについて ったことはありませんでしたが、彼は90 に近かった の床で、こう ねました。「幸せな 所はあるのだろうか？」私の 育は、母に完全に委ねられていました。彼女は からも、 宗教とは言えませんでした。宗教的 みの中で育てられたにも わらず、いわゆる宗教 というものには至 批判的でした。彼女は一つのことにしては 信的でした。それは、我が子に しては自分自身の で考えさせ、 して二次的な意 を制させない、ということです。彼女は私が宗教を「 理やり み まされる」ことから、断 固として守ろうとしました。彼女は我が家に仕えた家政 たちに、私に宗教のことを言 及しようものなら、その で解雇になることを警告していました。私が5, 6 のとき、ある一人の若い女性により、母の命令は破られました。彼女の野望とは、アラビアで宣 教 となり、多神教の「ムスリム主 」によって迷妄に っている不幸な人々の魂を救うのだというものでした。私はこのとき、初めてアラビアのことを耳にし、彼女はその め いた土地の地 を いてくれました。

ある日、彼女は私をワ ズワ ス刑 所を通る道の散 に れ出しました。おそらく私は行 が かったのでしょうか。彼女は私の腕を乱暴につかみ、刑 所の を指差してこう言いました。「言う事を かないと、お空にいる赤毛の男があなたをあそこに じ めるわよ！」私はこのとき初めて「神」について知りましたが、それは嫌なものでした。何らかの理由で、私は赤毛の男性を恐れており（そのことを彼女は知っていたのでしょうか）、いたずら坊主に を与えるために空に住んでいるこの男に しては、とても怖がっていたのを えています。私は家に るなり、母へその男について ねました。彼女が私を落ち着かせるために何と言ったかは えていませんが、若い女性は即座に首となりました。

やがて、大半の子供たちからはかなり れてスイスで学校に通いだし、14 になると英国のカントゥルジオ会修道院で学びました。学校チャペルでの奉仕や、 のクラスから、キリスト教は私に影 を与えたのでしょうか？それらは私だけでなく、 友たちにも全く影

を与えませんでした。それは くようなことでもありません。宗教は、人生と教育における一区分として限定されたような状 では、完全かつ 果的な形で生き延びることは出来ないのです。宗教とは全部か かのどちらかしかあり得ないのです。つまり、それは 全ての れた教えを小さく せるか、それらによって小さくされるかのどちらかなのです。 に一度か二度、他のクラスでの勉 と同じように、 についても勉 しました。そこでは、私たちの教育のバックボ ンを 成する、より重要な科目とは全く であると捉えられていました。神は 史的出来事に わってはならず、科学のクラスで学ぶ 象を定めたのでもなく、 在 行中の事象についても わりはなく、「完全なる偶然によって」成立した世界は、地平 の彼方に存在したもの、またはしないものへの言及を きに理解を求められたのです。神は必要事に する、余 でしかありませんでした。

それに加え、私は自分が存在している意味について知る必要がありました。そうした必要性を人生の中のどこかで感じたことのある人たちだけが、空腹 の食欲や性欲にも似たその必要性を知っているのです。私は、自分がどこへ向かっているのか、そしてそれは何故なのかを知らずして前 する にはいきませんでした。私は、自らの行 が物事の みにおいてどのような役割を果たすのかを理解しない限り、何もすることが出来ませんでした。私は、自分が何も知らないということを思い知らされたのです。つまり、何が本当に重要なのが分からず、私は自分の 知さによって、 い の中にいるかのよ うに麻 していたのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/166>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。